

山梨県内の小学校及び中学校における「コロナ禍」の体育科及び保健体育科授業の実態に関する調査

水野 佑香（山梨大学）

1. 目的

本研究では、研究1では小学校の体育科授業及び中学校の保健体育科授業の実施状況を調査するとともに、授業実施に対しての不安事項を明らかにし、研究2では、現在の小学校・中学校の体育科及び保健体育科授業の3密を避けた現在の実技授業の実態について調査するとともに、今後の体育の方向性について検討することを目的とした。

2. 研究方法

研究1

コロナ禍における体育科及び保健体育科授業に関するアンケート調査を実施し、回答はQRコードからGoogle フォームを用いてデータを収集した。

- 1) 対象者：山梨県内の全国公立小学校及び中学校
- 2) 調査期間：2020年8月中旬から8月下旬
- 3) 分析方法：領域間の不安の差と領域内の不安の差についてコクランのQ検定を行い、有意差がみられた場合に、多重比較検定（マクネマー検定）を行った。統計には、統計ソフトPASS Statistics 18を使用し、有意水準は5%未満とした。

研究2

コロナ禍における体育科及び保健体育科授業に関して無料WEB会議ツール（zoom）を用いてインタビュー調査を行い、録音したデータを逐語録として文書に起こした。

- 1) 対象者：現在山梨県内の小学校に勤務している初任者（1-3年未満）・中堅者（3-10年未満）・ベテラン（10年以上）の各カテゴリーから2名ずつとした。
- 2) 調査期間：2020年12月中旬から12月下旬
- 3) 分析方法：半構造化面接法を用いたインタビューによって分析データを収集し、質的な研究方法であるKJ法（川喜田，1920）を用いて分析を行った。

3. 結果と考察

研究1

現在の小学校の体育科授業及び中学校の保健体育科授業では、子供の主体的な活動である身体的接触や会話などに多くの不安を抱えながらも、殆どの領域が、次年度に持ち越すことをせずに、今年度内に実施予定であることが明らかとなった。また、教師が主体的に行う消毒の準備や、場の設定に対しては不安を抱えている割合が低いことから、授業実施に際して、教師が様々な対策や工夫を行なっている可能性が示唆された。

研究2

コロナ禍の授業実施率が高い背景には、各教師の視覚教材による工夫や、感染症を防ぐための独自の対策が行われていることが明らかとなった。また、コロナ禍における授業実施に際しては、カテゴリー（初任者・中堅者・ベテラン）ごとで、工夫の内容や、制限が多い現在の授業に対しての教師のモチベーションに有意な差が見られた。

4. 結論

二つの研究の結果から、コロナ禍の授業に対する制限や変化は、今まで表面化していなかった体育授業の課題点や各カテゴリーの特徴を顕在化させるという結果につながったことが考えられる。そのため今後は、コロナ禍で浮き出た「対話的な学びの捉え方」や「若手教師の研修の充実」など、様々な課題点を解決するための方法を再検討していくことが必要であると考えられる。

5. 主な参考文献

- 1) 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ（2003）KJ法の原点と核心を語る-川喜田二郎さんインタビュー-。質的心理学研究，2（1）：6-28。